

もっと  
福井の魅力を  
知ってほしい  
から・・・

# ふくいのもっと 魅力探訪

ふくいの“お宝”ひとくちメモ



提供：福井県立若狭歴史博物館

寄稿：福井県ふるさと文学館

## VOL.03 杉田玄白のもうひとつの顔

### 解剖書との出会い

杉田玄白は、1733年、小浜藩医の子として江戸の小浜藩邸に生まれた。8歳から13歳まで小浜で過ごした後、21歳で小浜藩医として召し抱えられた。39歳の時、同じ小浜藩医の中川淳庵が借りていたオランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』を見て、その詳細な人体図に衝撃を受け、翻訳を決意。前野良沢、中川淳庵らとともに翻訳作業を始めた。

### 翻訳の苦心と『解体新書』

玄白らは3年を費やして、1774年、ついに『解体新書』を出版した。日本語の本として初めて人体の正確な構造が明らかになり、日本の医学が近代化するきっかけとなった。さらに西洋の技術や文化を研究する蘭学も発展することとなった。

『解体新書』出版の情熱や苦心を記したのが、随筆『蘭学事始』だ。どこから手をつけてよいか分からなかった気持ちや、よい訳語を考えついた時の喜び



『解体新書』初版本（福井県立図書館蔵）

など、苦労話や達成感が綴られている。

この作品は、玄白が亡くなる2年前に完成し弟子の大槻玄沢に託され、写本として伝えられてきた。明治になって、新しい学問を切り拓く苦心談に感銘を受けた福沢諭吉が印刷物として出版し、現在まで広く読み継がれることとなった。

### 多岐にわたる創作活動

玄白は文筆家として、多くの著作を残している。浅間山の噴火、田沼意次の失脚など当時の世相や事件を記録した『後見

草』、長生きの秘訣をまとめた『養生七不可』、影法師との問答の中で医者としての心得や処方語を語った『形影夜話』など、多岐にわたる創作には、自分の知識を後世へ伝え、多くの人を救いたいという玄白の願いが込められている。現代に暮らす私たちが、健やかに生きるためのヒントを読み取ることも出来る。

県ふるさと文学館では、医をテーマに杉田玄白、かこさとし、山崎光夫の三人のゆかり作家を紹介する企画展を9月18日まで開催中。杉田玄白の『解体新書』初版本や絶筆の書「医事不如自然（医事は自然にしかず）」など、貴重な資料を多数展示している。玄白の著作や言葉に触れ、あなたの暮らし方を振り返ってみてはいかがだろうか。



杉田玄白書「医事不如自然」  
（大阪大学適塾記念センター蔵）